

静夜思

李白

白

牀前月光を看る

疑是地上霜

頭を擧げては山月を望み

頭を低れては故郷を思ふ

【作者】李白(七〇一〜七六二) 盛唐の詩人、杜甫(とほ)と並び称される。蜀(しよく)の錦州彰明県(きんしゅうしょうめいけん)

青蓮郷(せいれんきょう)の人で青蓮居士(せいれんこじ)と号した。幼にして俊才、剣術を習い任侠の徒と交わる。

長じて中国各地を遍歴し、四十二歳より四十四歳まで玄宗(げんそう)皇帝の側近にあり、後再び各地を転転とし多くの詩をのこす。安祿山(あんろくざん)の乱に遭遇して、罪を得たがのち赦される。六十二歳、病のために没す。

【語釈】\*静夜思：静かな夜の思い 楽府題(がふだい)の一つで唐代に入って作られるになった 新楽府(しんがふ)である

\*牀前：牀は床に同じ 中国式のベッド あるいはねどこ ねだいの前 \*低頭：うなだれてもの思いに沈むさま

【通釈】静かな夜、ふとねだいの前に、そそぐ月の光をみるとその白い輝きは、まるで地上におりた霜ではなかったのかと 思ったほどであった。そして、頭をあげて山の端(は)にある月をみて、その月の光であったと知り、眺めているうちに故郷のことを思い、うなだれて感慨(かんがい)にふけるのである。